

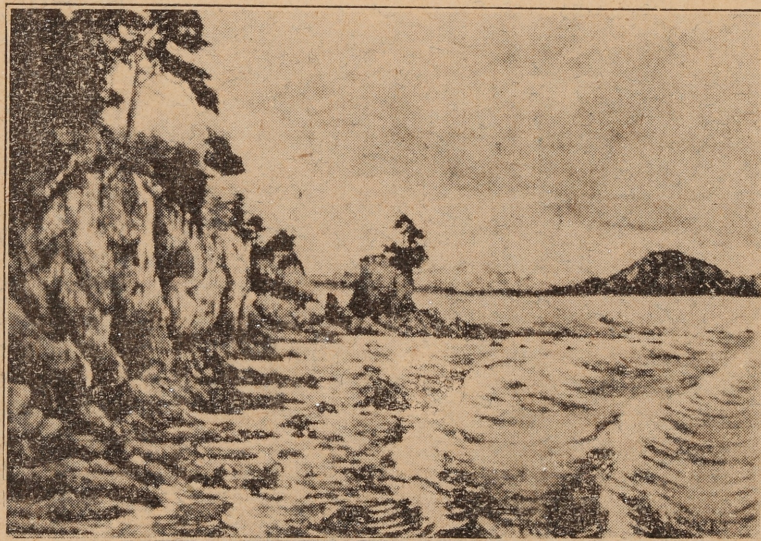
磨の浦(七四)の様な色彩の繪が好きだ。總て色彩の佳い繪で失敗するのは、矢張り色彩の様だ。否、そんな繪が多い様に見受けた。なんとか知つた顔のぐうたら兵衛を列べるのは實は知つて居ないのかも知れない。

余が野外寫生の端緒と所感

近江 金 森 宗 造

余が書生時代、丁度『みづゑ』第一號發行當時には、醫學の研究中であつた所が、醫學の解剖圖などを見ると、水彩畫の原色版で美しいのがやつてあるので、一つ摸寫して見んものと、十二色入七八十錢の學生用の畫具箱を求めて、畫いて見ると、便利なる記憶法であつたから、必要のものだけ模寫して、勉學の資とした。後皮膚病學教室へでも行くと、病者の皮膚の狀態色彩等の工合を記憶するの必要上、實物寫生の必要を感じて、ちよいと室内の寫生をする中に、繪畫に於ける趣味を覺へ、野外寫生の端緒を得た。

さて、野外に出て寫生して見ると、室内とは異りて、閉口したのは色彩なり陰影なりが時々變化すると、木の葉や幹の皮の龜裂迄一々書き現はすに如何にしてよきや、又近景の草木などの細部分が、眼に映じて大體の趣を現はす、



金 森 宗 造 筆

とか出來ぬのであつた。茲で『水彩畫葉』『みづゑ』等を見て研究しつゝあつた後、本業を此山間に營み傍ら爽快なる春の琵琶湖の風光に接し或は深山の風雪を寫して自然の趣を悟つた、以來余は自然を友とし師とし、傍ら『みづゑ』を指導者として愛讀してゐる。

楽しい一日

長野市花咲町

パ レ ッ ト

四月十八日。日曜日。快晴。セピヤクラの會員十名近くは約束の如く八時半妻科のお宮へ集合した。別役先生も見えて一行は安茂里村を指し春霞を排して出掛けた。際期の如く日本晴の好天氣、背はポカポカイやザリザリといやに暑い。丁度此の日は安茂里觀音のお祭なので行く人で目のまわる様だ。

汗臭い人と一所にゴタゴタになつて相生橋を渡つて行くと杏花は今が満開で安茂里一村は花で蔽はれ得も云はれぬ。淡紅濃白春の女神の色彩の巧なるを今更の様

に痛切に感じた。
ア、僕にあの女神の様な腕があつたら……右へ行けば觀音に
行くのだが一行は俗人(怒るだらうが)と別れて道を眞直に取り
田甫へ出て思ひ思ひの所へ腰を据える事にした。